

「自立活動」学習指導案

日 時:平成 29 年 6 月 12 日(月)

2 校時(9:45~10:30)

場 所:小学部 6 年 1 組教室

対象児童:小学部 6 年

男子 1 名

授 業 者:安次嶺 一成

指導主事:今村 清輝

I 研究テーマ

「主体的に活動する力を育む自立活動の実践的研究」

—発声・身振りをを用いたコミュニケーション手段の習得をめざす指導を通して—

II 研究仮説

- 1 自立活動において、発声や身振りをを用いたコミュニケーションの指導をすることで、自発的な発声や合図などの意思表示の場面が増えるであろう。
- 2 授業づくりにおいて、指導の目標や手立てを確立し、関わりある教師と共有することで、他の協働的な学習場面にも意思表示の活用が見られるであろう。

III 研究テーマとの関わり

平成 29 年 4 月の文部科学省告示第 73 号次期特別支援学校小学部・中学部学習指導要領前文では、「一人一人の児童又は生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められている。」と明記されている。このことから全ての児童又は生徒が自他の理解を深め、多様な人々との関わりをもち社会の中で生きていける人材の育成をもとめられていると考える。

特別支援学校の児童は、何らかの学習上又は生活上の困難さを抱えている。困難さを抱えている児童にとって前文で述べた「持続可能な社会の創り手になる」ためには、より児童一人一人に応じた支援が必要になってくる。

児童が持つ困難さを克服・改善し、人間として調和のとれた人材として社会と関わりをもつためにも自立活動が重要になってくる。

A 児は、小学部 6 年生のダウン症男児である。好きな活動や使いたい道具の支援を要求することがわずかにあるものの教師や仲間への問いかけに対して、意思表示することがない。発語がなく、「喃語」のような声を出すことがある。

A 児は、遠城寺式・乳幼児分析的発達検査によると移動運動 3.2 歳、手の運動 1.95 歳、基本的習慣 2.15 歳、対人関係 1.95 歳、発語 0.95 歳、言語理解 1.0 歳となっており、特に発語、言語理解に関する数値が低くなっている。ダウン症の特性では、菅野敦(1987) 小島道生(2012)らの指摘があるように言語発達、特に表出言語に課題を抱えることが多いと述べられている。A 児も同様にコミュニケーションに困難さを抱えており、本研究テーマを設定し実践することで本人の自信につながり主体的な活動の広がりがあると考えた。

1 児童観

6 年 1 組は、4 名学級で男子 2 名、女子 2 名が在籍しており、日常生活の指導、自立活動、生活単元学習を学級で行う。また、遊びの指導、生活単元学習の一部を 6 年 2 組、5 年生と合同で行う。さらにクラブ活動やコーポレーションタイムでの他学年、他学部との協働学習を行っている。

A児は、普段の活動で目的行動を行うことがほとんどなく、教師や友達に促されて行動することが多い。人前で注目を集めることは好きで、「今日の振り返り」など発表の場面では嫌がらず前に出て身振りなどの表現を披露することができる。一方、人から注目を集めたいために粗暴な行動に出ることもあるので、人との望ましい関わり方もスキルとして身に着けたい力である。

A児は、ダウン症の状態から生じる知的遅れや微細運動の不器用さ、左耳の重度の難聴がある。そのため、A児の持っている障害から他者とのコミュニケーションに影響を与え、主体的な活動に結び付きにくいと考えられる。

2 題材観

本題材「声と身振りで表現しよう」は、A児が抱えている意志の表出、要求伝達の少なさからくる学習や生活上の困難の克服・改善へと繋がるものと考ええる。

本題材で扱う様々な教具は、A児も興味・関心を引くものを揃えている。また、発声・身振り表現を本人にとって価値のある行為として定着を図るために、教具を選択する活動の中で「発声・身振りのコミュニケーション手段」を扱っている。さらに、口腔の働きを高める動きとして舌の動きの訓練と母音の身振りを交えて発声訓練を取り入れている。

題材の中にA児が苦手としている発声という行為を「遊べる道具」「人前に出て表現する。」「リズムカルな曲にのって踊る。」等の好きな活動と合わせることで主体的に生き生きと学習できることを期待する。

3 指導観

本時の具体的な指導内容・方法については、乳幼児コミュニケーションアセスメント・指導プログラム（CAP）を参考に構成している。

A児は、発達検査結果（S-M 社会生活能力検査、遠城寺式・乳幼児分析的発達検査法）からコミュニケーションに関わる数値が1歳以下の項目があり、発達年齢2歳までのコミュニケーションアセスメントと指導プログラムが構成されている内容は適切であると考えた。

コミュニケーションの発達と指導プログラム（CAP）の中では、初めに乳幼児のコミュニケーション発達アセスメント（ASC）をとり発達レベルの把握から乳幼児のコミュニケーション指導プログラム（TSC）に沿って学習を進める。

本プログラムによるアセスメント（ASC）によると、A児の要求伝達系6か月、相互伝達系11か月、音声言語理解11か月、音声言語表出4か月となっている。

指導プログラム（TSC）から下記の内容を取り入れた。

- ・要求伝達系レベル2（R2）リーチングによる物の要求、選択
- ・相互伝達系レベル3（I3）手遊び模倣
- ・音声言語理解レベル3（U3）大人が指した物を見る
- ・音声言語表出レベル1（E1）声かけ、身体感覚遊び動作に伴った発声・ゼスチャー

実際の生活年齢や日常の生活状況を考慮して内容を本人の実態にあうものに置き換え学習を計画する。

本時では、A児が興味・関心の高い教具を主に活用しながら「遊び感覚」で活動を進める。その際、使う教具の「選択」使いたい教具の「要求」等によって設定された教師とのやりとりで「発声・身振りのコミュニケーション」を繰り返す行う。

さらに、学習の最後にリズムダンスによる発声・身振りをを行い楽しい雰囲気の中から口腔の動きを高められるように設定した。

活動の振り返りは、学習に使った教具を見せ発表したい内容を選択できるように配慮を行う。

Ⅳ 題材名 「声と身振りで表現しよう」

Ⅴ 題材の目標

- (1) 模倣する表現の面白さを楽しむ。
- (2) 「挨拶」「お礼」「返事」「お願い」につながる発声、身振りの練習を繰り返し行い表現に慣れる。
- (3) 教室でお友達や教師と練習した発声、身振りを使い表現する。
- (4) 多様な形態集団「コーポレーションタイム」において、身に着けた発声・身振りを使って表現する。

Ⅲ 指導計画 総授業時数9時間（週1～2時間） その他（生活単元学習4時間） 本時

時数	題材	内容
1	声と身振りで表現しよう (アセスメントを含む)	・簡易聴力検査（紙、鈴、玩具、大太鼓） ・発声の状況把握
5	声と身振りで表現しよう	・マイクを使った発声訓練 ・発声と身振りの模倣ダンス ・呼気訓練（蛇笛、吹き駒、ロウソク消し、シャボン玉遊び） ・絵カードマッチング ・歯ブラシ口腔内リハビリ
4 生単	覚えたことを先輩や先生に表現しよう	・他学部交流・共同学習（コーポレーションタイム）にて「挨拶」「お礼」「返事」「お願い」の場面での表現活動
3	上手な表現を考えよう	・マイク、模倣ダンス、呼気訓練 ・コーポレーションタイムの動画を確認する ・場面設定演習

Ⅳ 本時の指導 （5/9時間）

1 本時の目標

- (1) 道具を使っていろいろな口の動きをしよう。
- (2) 体を使って先生のまねっこしよう。
- (3) 「お願い」「いや」を発声・身振りであらわそう。

2 研究対象児童の実態と自立活動の指導内容

- (1) 「実態把握から具体的な指導内容までの流れ」を図1に示す。まず、自立活動の六つの区分（図1ア）に整理し、そこから指導目標（イ）や具体的な指導内容（エ）と関連付けた。本研究では、主に「具体的な指導内容」の①から③を基本としながら学習を進めていくこととする。

図1（ア）

項目	1 健康の保持	2 心理的な安定	3 人間関係の形成	4 環境の把握	5 身体の動き	6 コミュニケーション
実態把握	・体温調節が苦手。	・好きな音楽が流れるとリズムをとり楽しむ。	・他者の様子をよく見ているが、不適切な行動が見られる。	・周りの様子をみて同じ行動をとろうとする。	・投・歩・登等の粗大運動ができる。 ・色塗り、シールを貼る等の微細運動が苦手。 ・模倣ができる。	・発語がなく、意思表示がほとんどない。 ・左耳の難聴を抱えている。

（イ）

指導目標	・発声・身振りをを使ってコミュニケーションの手段を習得する。 ・覚えたコミュニケーションの手段をいろいろな人に表現し自信をもたせる。
------	---

(ウ)



自立活動における項目	1 健康の保持	2 心理的な安定	3 人間関係の形成	4 環境の把握	5 身体の動き	6 コミュニケーション
		(3) 障害による学習上生活上の困難を改善・克服する意欲に関すること。	(1) 他者との関わりの基礎に関すること。	(5) 認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること。	(5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること。	(1) コミュニケーションの基礎的能力に関すること。

(エ)

具体的な指導内容	① 発声につながるボディ表現、幾種類の呼吸訓練を行い口の動きを高める。	② できる発声・できそうな発声と身振りを繰り返し表現する。	③ 場面に応じたコミュニケーションの手段を表現させ自発性・積極的な行動を喚起させる。
----------	-------------------------------------	-------------------------------	--

3 児童の動きの目標及び評価

できた◎ 教師が再度、模倣促しを行う○ (動作化のみ) 反応しない△

児童の動き (展開部分)	
好きな活動を選ぶことができたか。(二者選択)	
挨拶ができたか。	
返事ができたか。	
お願いができたか。	
お礼が言えたか。	
いやが言えたか。	

道具を使つての口の動き		体を使つての教師の模倣	
蛇笛を吹くことができる。		舌を教師の動きに合わせて動かす。(右)	
吹き駒を吹くことができる。		舌を教師の動きに合わせて動かす。(左)	
吹きポンプを吹くことができる。		舌を教師の動きに合わせて動かす。(上)	
ロウソクを吹き消すことができる。		舌を教師の動きに合わせて動かす。(下)	
シャボン玉をつくることができる。		母音表現ができる。「ア」	
マイクを使って発声することができる。		母音表現ができる。「イ」	
		母音表現ができる。「ウ」	
		母音表現ができる。「エ」	
		母音表現ができる。「オ」	

(2) その他 できた◎ ほぼできた○ 不十分△

学習の姿勢はどうであったか。()

児童は意欲的であったか。()

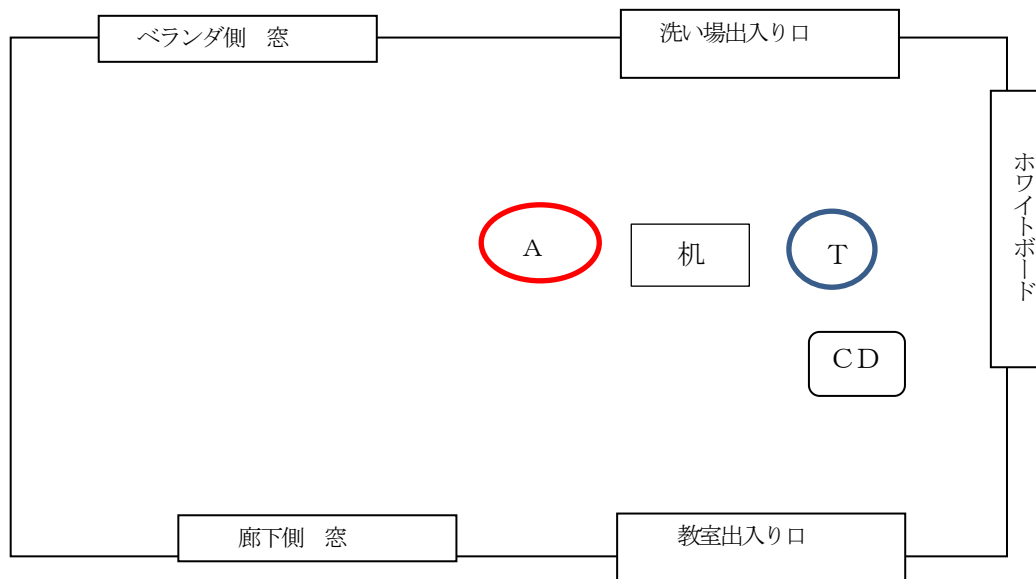
安全面はどうであったか。()

4 本時の展開

時刻	学習内容 □ は、最重要学習	教師の動き○ 指導上の留意点＊	児童の活動内容（□ 内）、児童の動き（☆）及び指導の手立て（※）、  発声・身振り	
			A 児の様子	準備物
9 : 45	①初めの挨拶 ②学習内容の確認 ・今日の学習をカードで確認をする。 ③絵カード学習 ・身近な道具を覚えよう	○児童の姿勢を整え、学習の準備をする。 ○今日の学習についてボードを使って説明する。 ＊児童の目線をホワイトボードに向けさせる。 ○絵カードを一つ一つ貼るごとに物の名前を伝える。	椅子に座り教師から本時の学習の流れを聞く。 ☆正しい姿勢で授業に臨む。 ※教師これから楽しいことがあるという雰囲気をつくる。 絵カードをマッチングする。 ☆同じ写真カードを貼り合わせる。 ※カードがマッチングできたら大いに褒めつつ、物の名前を教える。（その際、実物もみせる。）	ビデオ 三脚 絵カード び ホワイト ボード 蛇笛 吹き駒 ロウソク シャボン 玉液・吹 き棒
9 : 50	④呼気指導 ・色々な道具を使ってあそぼう。 ・遊びたい道具を教師に「発声・身振り」で伝える	○好きな道具を使い道具を使いたいとき「お願い」今は使わないとき「いや」の表現を表現模倣させる。 ○口をすばめる動きを意識させ、「強く」「長く」と息を吹く場面で意識させる。	吹きあそびをする。 ☆やりたい遊び道具を 2 者選択で選ぶ。 ※選ぶ際に、「どちらで遊びたい。」と問いかけ発声・身振りができたら褒めながら、楽しい雰囲気で遊びの活動を行う。 おねがい・おれい いや	
10 : 10	⑤発声指導 ・舌を上下左右に動かそう。 ・「ア」「ハ」「マ」「バ」「カ」 ・マイクに自分の声を出してみよう。	○口を大きく開ける動き、舌の上下左右中に動かす動きを模倣表現させる。	先生と一緒に舌や口を動かそう 声をだしてみよう ☆教師の動きを見て模倣する。 ※児童の正面で動きが見やすいようにゆっくり模倣させる。 できたら褒め、次のお楽しみダンスについて予告する。（楽しみという期待感を持たせる。） へんじ・おれい	I p a d マイク C D デッ キ スピーカ ー
10 : 20	⑥母音指導、お楽しみダンス	○身体表現を合わせたの母音発声指導を行う。	リズムに合わせてダンスをしよう。 ☆リズムにのっておどる。 ※教師は児童の正面にダンスの立ち、口形を見せながらリズムカルにおどる。 母音発声	
10 : 25	⑦学習の振り返り ・今日頑張ったことを発表する。		今日のふりかえりをしよう。 あいさつ・へんじ	
10 : 30	⑦終わりの挨拶		☆児童の前に提示させた教具やダンスの絵カードを置き、好きな活動を選択させる。 ※選択に戸惑っているときは、教師が判断して物を選ばせ取り上げたことについての頑張ったことを褒める。 ※選択した内容を教師の擬態語（できれば児童から自発的にできればそれを復唱する）で想起させる。	

5 教室配置図及び教具

②配置図



6 乳幼児コミュニケーションアセスメント・指導プログラム（CAP）について補足資料

同プログラムは、長崎・小野里（1994）によって発達年齢が2歳程度までの発達に遅れをもつ子どもが対象に開発された。発達の段階を0～24か月に分け、さらに4つの側面、伝達機能の「要求伝達系」「相互伝達系」（基底的伝達構造）、音声言語の「音声言語理解」「音声言語表出」（記号的伝達構造）に分類している。

同プログラムのことをCAP（Communication Assessment Program）と言いコミュニケーションの発達の促進と大人の関わり方の指導を目的に作成された。

（1）乳幼児のコミュニケーション発達アセスメント（ASC）について

CAPの中にあるコミュニケーション発達アセスメントASC（Assessment Scale of Communication）で、コミュニケーション発達レベルと同プログラムの4つの側面のバランスを評価できる。評価を基にプロフィールを作成することができ、3か月を1レベルとして4側面ごとに8つの発達レベルに換算される。このアセスメントは、TSCに対応し、課題を設定する際の評価として使用できる。標準的には1～2か月に一度実施する。

（2）乳幼児のコミュニケーション指導プログラム（TSC）について

CAPの中にあるASCを踏まえてのコミュニケーション指導プログラムTSC（Task Sheets of Communication）で、同プログラムの4つの側面に対応した内容になっている。日常生活の中で子どもと大人がどのように関わればよいかを具体的にアドバイスしている。課題は子どもが興味を持つ材料や場面とし、スモールステップできる。課題をフィールドバックでき、発達の意味もその都度確認できる。

授業者の評価

授業者の評価			◎適切	○やや適切	△改善が必要
項目			評価		備考
① 題材と研究テーマとの関わりがみられたか。					
② 題材の目標、本時の目標は適切であったか。					
③ 個人の目標は適切であったか。					
④ 授業の展開は適切だったか。					
⑤ 指導形態は適切だったか。					
⑥ 児童への支援は適切であったか（タイミング、声かけ、動き等）					
⑦ 場の設定は適切だったか。					
⑧ 教材・教具は適切だったか。					
⑨ 時間の配分は適切だったか。					
⑩ 個人目標の達成状況の確認と次時の学習内容をどうするか					

8 検証

検証項目	検証の方法	結果
児童が教師とのやりとりでコミュニケーション手段を身に付けようとする様子が見られたか。	行動観察	
本時の目標を意識して指導することができたか。	授業者の反省	
本時の学習内容が、乳幼児のコミュニケーションアセスメント・指導プログラムの内容に沿っているか。	アセスメントと指導プログラム課題シートを確認する。	